

ノート

学生相談室報告 (11)

額 額 康 兵

Report from the Counseling Room (No. 11)

Kohei KOKETSU

This is a personal note: what is the distinction between normal and abnormal of human being.

今回の報告は、日頃、筆者が少々気になっていることを雑感的に記してみたいと思う。

それは、いったい世によく言われる「正常」と「異常」とは何か、また、この両者を厳密に区別することは可能なことであろうかということである。しかし、この問題はよく考えてみると、とても安易に答えることはできないように思う。

たとえば、人類史の中における人間を考えた場合、歴史そのものがかなり異常にみえるような事例が多く、各個人ではとてもその責任を負うことができない部分がある。最も、だからと言って各個人が歴史と無関係であるなどと言っているのではない。いや、それどころか歴史と個人、あるいは歴史と人間との関係は決して分離できるものではない。

我々が巨視的に人類史ないしは歴史を振り返ってみると、歴史そのものがかなり異常な要素を有していることに気づかされる。異常といえば、なぜ我々は絶えず戦うのであろうか。人類がこの地上に登場して以来、我々は絶えることなく戦争をおこなってきた。戦争という人間の行為をその都度いかに正当化しようとも、後年戦争という行為そのものを反省した時に、やはりその行為が誤りであり、異常な行為であったことに思い至るのである。なぜ人間は戦いをするのかという問題は、おそらく簡単に解明されないであろう。歴史の異常性は人間の異常性と共通項があるとすれば、話はまだ簡単である。しかしことはそう単純な話ではないし、ましてや短絡的に歴史の異常性を人類または個人の異常性に置き換え

ることはあまりにも無謀にすぎると思われる。ここでは、それゆえに歴史と個人、歴史と人間というように大きなテーマではなしに、人間の正常と異常という事柄はいったいどういうことなのかを考えてみたい。

私が学生時代、よく先生に「完全な人間になれ」、「本来の自己にめざめよ」などと説教めいて言われたものである。けれどもこれらの言葉を今になって考えてみると、なんとも変な気がしてならない。我々は誰も「完全な人間」を見た者はいないし、また「本来の自己」にしても「自己」以外のどこかに「本来の自己」があるのだろうか。あるいは我々の日常生活を通して、「本来の自己」にめざめた人を直接見たことがあるのだろうか。「完全な人間」とか「本来の自己」云々ということは、すこし前に流行した表現を借りれば、人間が勝手に自分の都合を考えて作りだした「幻想」だと言われても仕方がないであろう。

以上のように考えると、人間の正常とか異常という事柄もそう簡単に説明できないようである。その基準をどこに求めたらよいのであろうか。例えば、「健康」といわれるものは、ひとつの価値規定ないしは価値概念である。WHO（世界保健機構）の定義によると、健康とは疾病でないというだけでなく、身体的にも心理的にも具合がよいこととなっている。これは「健康」の理念としてはよいのであるが、現実の生体のありようはどうかというと、全き健康「体」というものはないといえる。例えば、病葉の

一葉もない樹木を見つけることが難しいように、虫歯が一本もない成人というのは稀であるように、生体は部分的には脆弱で不安定な状態を併存させながら、全体としては生体の恒常性を保ち続けていくのである。たぶん、これが「健康体」といえるであろう。普通には、健康であれば正常、病気であれば異常と決めてそれ以上は追求せずに過ごしていくが、ことはそれほど単純ではない。

精神の健康という、一般的にはつぎのような状態をいう。すなわち、精神障害がなく、性格(行動・言動)が安定していて、環境に柔軟に適応しつつ、環境を生存にかなうように改革することができ、自己と他者、現実の状況をよく感受し認識していることというように規定する。しかし、これらのすべてを十分に備えていることは案外大変なことである。一部に不備な面があっても他の機能によって補充されて、全体としては恒常的な生活を常んでいけば精神的に健康であるといえるであろう。

それでは我々が真の意味で「正常人」として生きていくためにはどうすればよいのであろうか。我々は正常と異常という相反する要素を冷静に洞察するとともに、これらの対極的な事柄に対して弁証法的な緊張関係を結ぶことによって自己を高め、強めながら、人間としての「ゆたかさ」を絶えず求め続けていく努力が必要であろう。とはいえ、このような正常と異常との弁証法的な緊張の中で生きることが、決して単調で安逸な道ではあり得ない。それは、ある場合には自己犠牲を伴う道でもある。しかし、

人間はこのようなパラドキシカルな存在であることを深く認識しなければ「正常」と「異常」の本質的な相違を正しく見抜くことはできないであろうし、また真の意味で「正常な人間」として生きることも不可能であろう。問題となるのは、仮に我々が正常者であるとしても、同じ時代の同じ社会に生きている者としては、同時に「異常」さをも共有することを避け得ないということである。

参考文献

- 1) 平山正実：現代人の異常性(2), 28-41, 1975
- 2) 弘末明良：現代における正常と異常(精神医学入門シリーズ, 3), 38-43, 1984
(受理 昭和63年1月25日)

付記：過去1年間に学生相談室で取扱った件数を相談内容別に集計した下表を参照いただきたい。

相談内容別取扱件数

(昭和62年1月18日～昭和63年1月17日)

相 談 内 容	件数	%
1. 学業全般(留年を含む)	94	40%
2. 学生生活	84	37%
3. 対人関係(恋愛を含む)	18	8%
4. 精神衛生	16	7%
5. 進路問題(専攻・就職など)	12	5%
6. 健康問題	6	3%
計	230	100%